

琉球大学学術リポジトリ

戦略1「特別編入学による太平洋島嶼地域からの留学生受入事業」：
グローバル人材育成のための教育体制構築に向けて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2021-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 登美子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48509

戦略1「特別編入学による太平洋島嶼地域からの留学生受入事業」 —グローバル人材育成のための教育体制構築に向けて—

加藤 登美子

琉球大学グローバル教育支援機構

1. 事業概要とこれまでの経緯

「特別編入学による太平洋島嶼地域からの留学生受入事業」は、本学がグローバル人材育成のための教育体制構築を目指しスタートした第3期中期計画の重要支援の取組のひとつである。これは、太平洋島嶼地域との連携を強め、人材育成や相互の発展に寄与するため、短期大学以外の高等教育機関が存在しない太平洋島嶼地域の学生に本学の特別編入学制度を活用し、当該地域の短期大学卒業者に「学士」を授与する体制を確立するものである。加えて、日本人学生が留学生との交流や学び合いを通して異文化理解を促進し、グローバル人材育成を目指している。

2017年度には短期交換留学生としてパラオ共和国2名、ミクロネシア連邦3名、マーシャル諸島共和国1名の留学生を受け入れ、そのうちの1名（ミクロネシア）と科目等履修生として受け入れたマーシャルからの留学生1名がそれぞれ農学部と観光産業科学部の特別編入学試験に合格することができた。2018年度にはパラオ2名、ミクロネシア1名の編入候補生が在学したが、残念ながら合格には至らなかった。

2. 2019年度の取り組み

2.1 大学説明会・個別相談会

2019年度も引き続きパラオ・ミクロネシア・マーシャルの3国に出向き、現地短期大学での大学説明会及び個別相談会を実施した。2018年度までは大学説明会のみ行っていたが、2019年度からは個別に対応する個別相談会の時間を設けた。パラオでは、日本語講師の要請を受けて1年に2回の説明会・個別相談会を行った。また、現地での告知がうまく行われていない事実を踏まえて、説明会案内の掲示だけではなくブックストア（購買部）にチラシを配置し、直接キャンパス内で学生に声を掛け説明を行った。その効果があったのか帰国後に説明会に参加していない学生からの問い合わせが数件あった。



College of the Marshall Islands での説明会の様子



Palau Community College の日本語講師（左）と学生たち

2.2 帰国留学生のフォローアップ

現地に行く理由のひとつに、帰国した留学生のフォローアップがある。修了してしまえば終わりなのではなく、琉球大学に編入する、しないに関わらず関係を構築することで情報収集ができ、現地での助けになっている。帰国後に国のためにゴミの分別活動などの社会貢献を行っている元学生や、再留学を目指して日本語学習を続けている元学生もおり、進路や日本語学習などの相談に乗っている。2019 年度には 4 名の帰国生と再会した。



説明会で琉球大学での経験を語るマーシャルの元留学生



パラオでボランティア活動をする元留学生（右）

2.3 現地日本語講師との連携

現地の日本語講師との連携は大変重要である。島嶼地域では現地の担当者との連携が難しいときがあり、日本語講師の協力があると大変スムーズに進む。日本語講師が不在の国は日本語クラスも開設されておらず、プロモーションが難しくなる。現地の日本語講師は、JICA 青年海外協力隊派遣の講師、現地永住者など様々である。2019 年度は各国の日本語講師と面談することができた。ミクロネシアでは前任者が帰国後、ようやく赴任した講師が体調を崩し、面談できたときにはすでに帰国が決まっていた。その後の日本語講師

採用は未定のみである。マーシャルも面談後、青年海外協力隊派遣の講師が帰国になったが、2021年度に新しい講師を派遣予定である。パラオの日本語講師は永住者であるのでこのプロジェクトが始まって以来同じ講師が担当していて安定している。



College of the Marshall Islands の JICA 派遣日本語講師



College of Micronesia-FSM の日本語講師との面談

2.4 国内での視察訪問・情報交換

2019年度からの新たな取り組みとして、国内にも視野を広げた。島嶼地域の留学生は主に国費で留学しているため2018年2月に東京の専門学校、日本語学校で収集した情報をもとに、国費留学生を受け入れている日本語学校2校、編入候補生の出身専門学校1校を訪問した。

また、国内で多くの留学生を受け入れている立命館アジア太平洋大学（以下、APU）にて情報収集、意見交換を行った。APUに在籍している太平洋地域出身の学生の様子や編入学試験および入学試験の状況について聞き、日本語授業を見学した。



立命館アジア太平洋大学



立命館アジア太平洋大学での日本語授業

2.5 太平洋島嶼地域からの留学生の受け入れ

2019年度は、パラオ短期大学から特別編入学試験にチャレンジする学生の受験前に科目等履修生として日本語の予備教育を行い、集中的に個別指導も行った。その期間には本学

後援財団による奨学金を付与し、その後国際地域創造学部経営プログラムに合格することができた。編入後は QUEST 基金と JEES 留学生奨学金（少数受入国）で生活資金を確保している。合格した学生は、本学の学生による学生のための団体に所属し、日本人学生への英語学習サポートや留学などに関するカウンセリング、日本語会話学習グループの運営などの国際交流を積極的に行っている。また、短期交換留学プログラムに2名のマーシャル出身の学生が来学し、日本学生支援機構からの奨学金に加え、世界展開力強化事業から宿舍代金と航空券を支給している。

2019年度の目標値は6名であったが、学部生・大学院生も合わせると目標値を1名上回る7名の島嶼地域留学生を受け入れることができた。

表1 太平洋島嶼地域からの学生数（2019年5月1日時点）

番号	国籍	身分	学年	所属等
1	マーシャル諸島	大学院生	1	理工学研究科
2	マーシャル諸島	研究生	-	人文社会科学研究科
3	ミクロネシア連邦	学部生	4	農学部 亜熱帯生物資源科学科
4	マーシャル諸島	学部生	4	観光産業科学部 経営学科
5	パプアニューギニア	交換留学生	-	国際教育センター
6	パラオ	交換留学生	-	国際教育センター
7	パラオ	科目等履修生	-	大学教育センター

・パラオの学生1名：特別編入学試験合格を得て令和2年度より国際地域創造学部国際地域創造学科 経営プログラム3年次入学。

※太平洋島嶼地域：太平洋州各国のうち、オーストラリア、ニュージーランドを除く14カ国（パラオ、マーシャル、ミクロネシア、キリバス、クック諸島、ツバル、ナウル、ニウエ、バヌアツ、サモア、ソロモン諸島、トンガ、パプアニューギニア、フィジー）

2.6 超短期留学特別プログラムの設置

毎年現地でのプロモーション、リクルートを行っているが、太平洋島嶼地域から学部生として日本人と同じように授業を受講できる日本語能力がある学生を確保することは困難である。そのために今までは編入学の前段階としてグローバル教育支援機構が提供する日本語プログラムに短期交換留学生や科目等履修生として参加させ、準備を進めてきた。しかし今後は将来の正規生としての受け入れを長期的な観点で考え、1-2週間の超短期留学特別プログラムを新たに設置した。超短期留学特別プログラムで実際に来沖し、本学のアカデミックな学習環境を体験することで琉球大学に留学したいと思わせ、超短期留学特別プログラムから短期交換留学プログラム、そして特別編入学へとつなげていくことが狙いである。更には、受け入れ島嶼地域を3国だけではなく、キリバス、クック諸島、ツバル、ナウル、ニウエ、バヌアツ、サモア、ソロモン諸島、トンガ、パプア・ニューギニア、フィジーの14か国に拡大した。

2019年度には実際のプログラムの企画・調整も終わり、マーシャルから2名の応募があったが、コロナウイルス感染拡大の影響で中止となった。



国立大学法人 琉球大学 戦略1：国際的な島嶼型高等教育システムの構築に向けた教育改革

太平洋島嶼地域からの留学生受入事業 -グローバル人材育成のための教育体制構築に向けて-

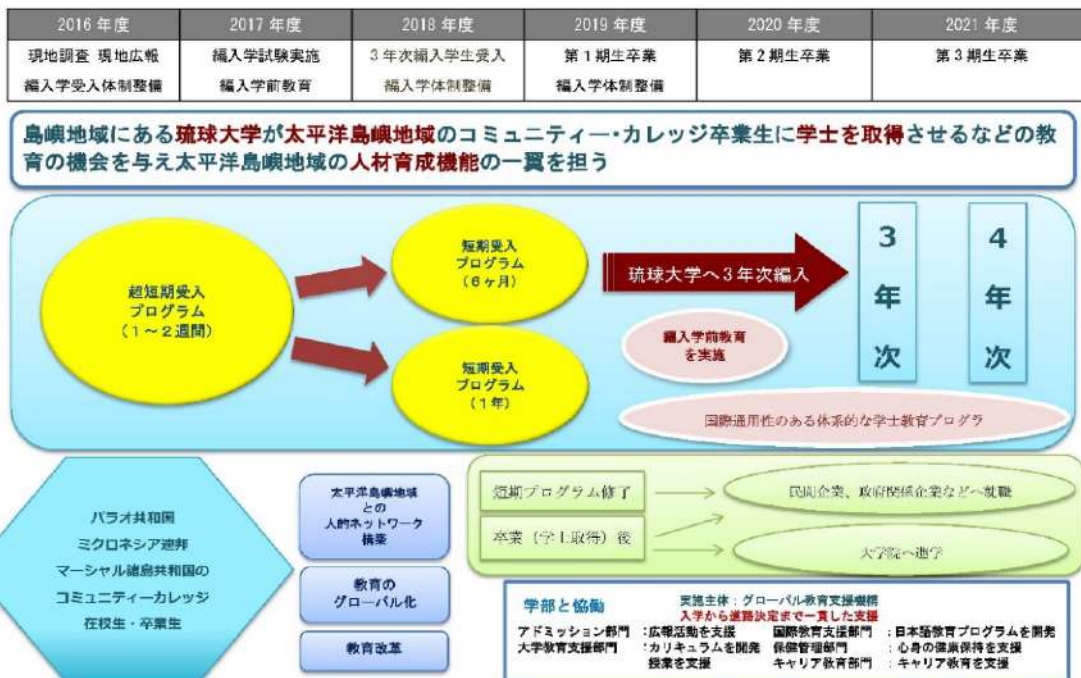


図1 超短期留学特別プログラムを含めた構想図

3. 今後の展望

今後も現地での大学説明会や個別相談会を通じて大学をアピールし、リクルートを続けていく予定であるが、2020年度はコロナ禍の影響で先が見えない状態である。今後コロナウイルス感染拡大で留学生が日本へ渡航できない場合は、超短期留学特別プログラムもオンラインによる研修を計画実施していく予定である。そして、日本国内での旅行・移動が可能であれば、本学での長期的な進学に関心がある国内在住の太平洋島嶼地域出身者の参加者の受け入れも視野に入れている。

また、現地での大学説明会や個別相談会を通じてのアピールだけではなく、学生に合ったサービスとしてソーシャル・ネットワーキング・サービスのアカウントを開設し、本学での太平洋島嶼地域出身学生の活躍や留学情報、交流イベント、日本や沖縄の文化などの情報を発信する広報活動を実施しているところである。今後も状況にあった方法で幅広い情報を積極的に発信していきたいと考えている。